

トチノキ・・・



10・11号棟の北側に沿って、トチノキが植栽されています。入居当時に比べれば見違えるほど大きく育ちましたが、残念ながら私ははまだ花も実も目にすることがありません。

従って、今回は特徴的な冬芽を取り上げてみました。かなり剪定が進んでわずかしが残っていますが、それでも春待つ命を育む冬芽が陽光に当たるとキラキラ光り、触るとべとつくほどです。これが寒さと乾燥から身を守るためにトチノキが選んだ生き方なのでしょう。

さて、トチノキから当初連想したことが2つありました。

まず1つは「栃木県」。誰もが栃木の名は、トチノキがたくさん生えているので、それが転訛して「トチギ」なったと予想するはずですが、しかし、栃木県のHPを閲覧して驚きました。

栃木町（現在の栃木市）内に神明宮という神社があり、社殿の屋根にある2組の千木（ちぎ）と8本の鰹木（かつおぎ）が、遠くから見ると10本に見えたことから、神社の辺りを「十千木（とおちぎ）」と呼ぶようになった。

「千木」が「十」あるから「十千木」とは思わず絶句。県名が洒落の所産なのは、おそらくここだけではないでしょうか。加えて「栃」の字まで奮っています。これは国字で日本生まれの漢字です。「トチ」は千を十倍して万になることから、古くは「枳」という文字が使われていました。現在では石という意味の「厂」を付けて表記していますが、漢字まで頓智心に満ちています。このことは、栃木県生まれの方には是非試してみたいものです。



もう1つが、斉藤隆介の「モチモチの木」です。

霜月20日の晩、モチモチの木に灯がともるといふ美しいイメージは圧巻です。モチモチの木とは主人公の豆太が「その実を粉にしてお餅にするとほっぺたが落ちる」くらい美味しいことから家の前に立つトチノキに名づけたものです。

この栃の実には多量のでんぷんが含まれていて、縄文時代から食用とされてきました。その1つに「栃麺」という「変わりうどん」があります。ここで、「大言海」（大槻文彦著）から「栃麺棒」についての解説を引用します。

栃の実を砕きうどん粉を混ぜて栃麺を作るためには、非常に手早く棒を使って延ばさなければ、麺が収縮してしまう。このように手際よく棒を扱うことを「栃麺棒を振る」と言い、そのあわてふためいた有様を「とちめく」と言う。

「栃麺棒を食らう→面食らう」もこの言葉からの派生語ですし、自分勝手に理解して失敗することを「早とちり」などと言いますが、語源はどれもトチノキだったのですね。トチメンボーは「吾輩は猫である」にも登場していて、最初に読んだ時はこのくだりの面白さが全く理解できなかったことをよく覚えています。

